

## 京都春期福音特別集会 一般講演

## 生命の泉

1993年5月15日 (京大 楽友会館)

奥田 昌道

キリストと自分の一対一の関係 第二イザヤの預言 (イザヤ53章) 第二イザヤの預言 (イザヤ61、63章) ヨハネの福音書4章(サマリヤの女) ローマ書8章(18〜28節) ヒルティの『眠られぬ夜のために』 ローマ書8章(29〜39節) 詩篇第36篇(生命の泉)

## ●キリストと自分の一対一の関係

外は新緑の季節で、今日はあおいまつり葵祭の日でもありますし、外へ行きたいお気持ちが多々あるうかと思えますのに、おいでくださいました。しばらくの間、聖書の中に沈潜していただきたいと思います。

私が大学の中で聖書の会を開いたり、あるいは家庭を場所として日曜日ごとの聖書の集まりをもったりしています唯一の願いは、日本の方々に本当にキリストを知ってほしい、キリストの心を知ってほしい、聖書が訴えようとしている神髄を知っていただきたい、その願いだけなんです。教派・教団を形成する意志はまったくございません。

本来、神さまと自分、キリストと自分の一対一の関係でありまして、皆さんお一人お一人がいろいろな機会を通して、すばらしいキリストという見えざるお方に出逢って、直結していただきたい。そういう趣旨で、私の中にある聖書の神髄の一端をお話したい。

聖書とはかく、単にキリスト教徒の聖典であり、ヨーロッパの人たちの精神的な拠りどころではあつても、われわれ日本人には異質なものと、無縁なものとして敬遠されがちであります。われわれ日本人には関係がないと思っている人が案外多いんですね。

しかし、聖書、特に新約聖書は、愛そのものなるキリストの言葉、行為を中心として、我々のハートに深く語りかけ、人間としての我々を内側から本当に自由にし、生きることの喜びを知らしめ、人間の生き方にとって最も大切なものを示してくれている宝の書であるといえます。こう私は受けとっています。この宝を見つけてほしい。この宝に出逢ってほしい。そういう気持ちが高い。

聖書は旧約と新約の二つから成り立っています。旧約聖書の土壌から咲いた花が新約聖書であり、その中心はイエス・キリストです。イエスという方の言葉、行為が新約聖書のマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネという四人の人たちによって書かれた福音書という書物の中に書かれています。そこに本当に生きる知恵といたしましょうか、生命がみなぎっております。その一端にふれていただきたいという願いでございます。



マタイ伝第5章3節から10節は山上の垂訓といわれているものです。最初の第3節は後でご講演いただく小池辰雄先生の管轄領域〔講演「恵福なるかな霊の貧しき者」(マタイ5・3)〕でありまして、これは私は侵さないようにいたします。今日は二番目から話したいと思えます。

「4 恵福なるかな、悲しむ者。その人は慰められん。」(マタイ5・4)

聖書の音信<sup>おとしづれ</sup>、旧約聖書がすでにそうですが、キリストの音信も、実は基軸はこれだと受けとっています。これが大きな柱をなしている。今満ち足りている人、今すべてが整っている人はキリストをなかなか求めない、求める必要がない。けれども、どんな人にでもいろいろ悲しいこと、辛いことがおとずれてきます。肉親を失ったり、不治の病いに倒れたり、自分もしくは近親者でいろいろなことが起きます。最も大事なものを失うこともあります。我々が望まざるところにぶつかつて、打ちひしがれたようなとき、また内面的な問題から悲しいことがあります。そんなことに対して天来の響きとして、

「私があなたの慰めとなるよ、私がおあなたを慰めるからね」

こういうみ声が聞こえて来る。それが山上の垂訓の第二番目の言葉なんです。以下と合せて全部で八つ項目がならんでいまして、「八つの祝福」といわれるけれども、それぞれに味わい深いキリストの言葉です。この八つの、

「恵福なるかな霊の貧しき者」

から

「義のために責められたる者」

まで、こういう風にあげられています。人たちは、実は全部キリストのお姿です。キリストがご自身のお姿をこういう告白をもつて人々の前に語っておられる。

キリストほど柔和なる方はありませんでした。またキリストほど本当に義に飢え渴いた方はありませんでした。キリストほど憐れ<sup>あわ</sup>みに富んだ方はありませんでした。また、キリストほど心が純一な方もいらつしやらなかつた。キリストは本当に和をもたらしてくださいました。平和ならしめてくださった。義のために責められた方でありました。義というのは神さまのみ心をひたむきに求めていく姿です。そういうことのゆえにいろいろな迫害を受け、誤解を受け、遂に十字架にお懸かりになったという、そういうお方です。

## ●第二イザヤの預言(イザヤ53章)

こういうキリストのことを実は旧約聖書のイザヤ書の第53章が適切に預言しております。このイザヤ書を書いた方は「イザヤ」と名前がついていますが、無名の預言者といわれています。当時のイスラエルは紀元前721年に北イスラエルがアッシリアに滅ぼされました。南のユダ王国は紀元前587年にバビロンによって滅ぼされて、主要な人がバビロンに連れていかれバビロン捕囚という50年間苦しい体験をいたしました。538年にエルサレムに帰って



来るけれども、このバビロン捕囚の中に無名の預言者イザヤがいたといわれています。そのイザヤが預言として語らしめられたのが、この53章の預言の言葉なのです。

「<sup>3</sup>かれは侮られて人にすてられ 悲哀の人にして病患をしれり」(イザヤ 53・3)

とあります。キリストは別に病気を患われたわけでもありません。キリストご自身ご自分の問題で深い悲哀があたりだったとは思わない。でありながら、彼がこのように預言されているのは、キリストは病める人を見たら病める人と同じ姿になってしまわれる。心にも痛みのある人にごぶつかつたら、その痛みを自分の痛みとして味わってしまわれる。

新約聖書のヨハネ伝にラザロの復活の記事(11章)がありますが、自分が愛されたラザロは墓に葬られてもう四日も経っている。みんなが泣き悲しんでいる。マリヤやマルタも泣いている。その場面でキリストは思わずもらい泣きして泣いておられるんですね。その時、キリストは神さまのみに従ってラザロを復活させようとして墓に行かれた。そして、事実墓石をとり除けて大声で「ラザロよ、出て来い！」と叫ばれたら、ラザロが出て来たと書かれています。

そういうことをなさるキリストが何故涙を流しておられるのか。「復活させて生き返るんだったら泣く必要はないじゃないか」というのが常識の判断です。けれども、その人が痛み悲しみ泣いている時に、キリストは痛みを自分のものとして味わってしまった、その人と一つに溶け込んでしまう、そういうお方だと私は思っている。だから3節はそういうキリストの姿を表している。次の4節にいきますと、

「<sup>4</sup>まことに彼はわれらの病患をおい我儕のかなしみを担えり 然るにわれら思えらく彼はせめられ神にうたれ苦しめらるるなりと」(イザヤ53・4)

これは十字架を指しています。単に同情的に感情的にその痛みを痛みとすることにとどまらず、悲しみの源、病いの源、さらには人間の罪、そういったものを全部を自身自身に背負って、十字架で神に打たれ、叩かれ、砕かれておられるという、そういう姿がここに預言されている。

「どうして神の愛し給う御子キリストが十字架にかけられるのか。彼は何か悪いことをなさったのか？」

と、そう思いますけれども、当時の人はそうは思わなかった。むしろ、「彼は自らの咎のゆえに、神に棄てられて苦しめられているんだ」と思った。しかし、実はそうではなかったということがこの預言の以下の言葉です。

「<sup>5</sup>彼はわれらの愆のために傷けられ われらの不義のために砕かれ みずから懲罰をうけてわれらに平安をあたう そのうたれし瘡によりてわれらは癒されたり」<sup>6</sup>われらはみな羊のごとく迷いておのおの己が道にむかいゆけり 然るにエホバはわれら凡てのものに不義をかれのうえに置きたまえり」(イザヤ



53・5〜6)

4節から6節のようなことが本当にあるんだろうかと。しかし事実あったんですね。私はキリストという方のすばらしさ、そしてまた、私がキリストという方に惹かれる最も根源的な点はこの点であります。

「自分が立派だから私について来なさい」とはおっしゃらなかった。

「私はお前の悩みを一緒に背負っているよ」

と、我々の知らざるところで黙って背負っておられる、黙って神の審きを受けておられる。後から気がついたら、

「あれは私のために身代わりに実は審かれてくださっていたんだ」と、そういうお方なんです。

学校教育とか家庭教育とかいろいろありますが、教育とは何か。私は教育の最も根源はここだと思っています。他人のマイナスをひつかぶるといって、それが本当の愛だ。そういう姿をキリストがここで示しておられる。この前に私は本当に頭を垂れざるを得ない。私に「この姿になれ」と言われたって、百%なれませんよ。誰かのためになれるかもしれない。けれどもキリストは本当に全ての人のために、この姿をとっておられる。だからたまらないわけですね。

「<sup>11</sup>かれは己がたましひの煩勞をみて心たらわんわが義しき僕はその知識によりておおくの人を義とし又かれらの不義をおわん」(イザヤ53・11)

すべてのお父さん、お母さんが子供さんたちに対して、このキリストの心、キリストの姿、愛というならばこういう姿で、本当に自分を投げ出した時に、本当に親子の絆というものが回復されるんじゃないか。いま日本の中でいろいろな家庭問題が起こっていますね。私は責める資格なんかひとつもありませんが、私は日本の先生方、またご両親方がこういうキリストの心で、自分が本当にイザヤ書53章の姿になろうと、そういうふうになっていただけたらとひそかに願っています。

「<sup>12</sup>このゆえに我かれをして大なるものとともに物をわかち取らしめんかれは強きものとともに掠物をわかちとるべし彼はおのが靈魂をかたぶけて死にいたらしめ愆あるものとともに数えられたればなり彼はおおくの人の罪をおい愆あるものの為にとりなしをなせり」(イザヤ53・12)

一言で言つてこの執り成しという姿です。これがこのあともずっと聖書の言葉に出てまいります。執り成す姿は本当にすばらしい。このイザヤ書53章の預言者自身は誰のことを言っておられるのか知らずして多分預言しているんでしょうけれども、しかし、その内容たるや誠にひとりの人、600年ほど後に現れてくるひとりの方を指し示していた。そういうところに預言というもののすばらしさもあるわけです。



## ●第三イザヤの預言（イザヤ61、63章）

次にイザヤ書の61章以下のところを見たいと思います。これは通常第三イザヤと呼ばれている。いまの53章は第二イザヤと呼ばれています。この第三イザヤというのは、紀元前515年以降に現れた預言者で、やはり第二イザヤの精神を深く身に体していた方といわれています。

この61章は、実は主キリストご自身がご自分の預言の言葉としてルカ伝福音書（4章）の中で引用しておられますが、実にすばらしい言葉です。ここに引かしていただきました。1節から3節。

「主エホバの霊われに臨めり。こはエホバわれに膏をそそぎて貧きものに福音をのべ伝うることをゆだね。我をつかわして心の傷める者をいやし、俘囚にゆるしをつげ、縛められたるものに解放をつげ、<sup>2</sup>エホバのめぐみの年とわれらの神の刑罰の日とを告げしめ、又すべて哀れむものをなぐさめ、<sup>3</sup>灰にかえ冠をたまいてシオンの中のかなしむ者にあたえ、悲哀にかえて歡喜のあぶらを予えうれいの心にかえて讚美の衣をあたえしめたもうなり。かれらは義の樹エホバの植えたもう者、その栄光をあらわす者ととなえられん」（イザヤ61・1〜3）

「刑罰の日」とは審きの日、審判の日、それが悪を行なった者には審判ですし、苦しみの中にある人には解放、解き放ちということになります。「灰」というのは悲しみの象徴、「冠」は喜びの象徴です。

「心の傷める者をいやし、すべて哀れむものをなぐさめ、かなしむ者に歡喜のあぶらを与えたもう」「

これがキリストのお姿です。

それから次の63章、これはイスラエルの民がいかにして神さまにどのように愛されてきたか、それを思い起こして書いていくくだりです。特に出エジプトの時に著しく顕われていました。それをここに思い起こして書いています。7節から9節はすばらしいところですよ。

「われはエホバのわれらに施したまえる各種のめぐみとその誉とをかたりつげ、又その憐憫にしたがい其おおくの恩恵にしたがい、イスラエルの家にほどこし給いたる大なる恩寵をかたり告げん。<sup>8</sup>エホバいたまえり、誠にかれらはわが民なり、虚偽をせざる子輩なりと、斯てエホバはかれらのために救主となりたまえり。<sup>9</sup>かれらの艱難のときはエホバもなやみ給いてその面前の使をもて彼等をすくい、その愛とその憐憫とによりて彼等をあがない、彼等をもたげ、昔時の日つねに彼等をいだきたまえり」（イザヤ63・7〜9）

運命共同体であると。高いところに鎮座ましましてじつと見ているようなお方ではなかつた。出エジプトがそうです。元はと言えば、ヨセフがエジプトに降って、エジプトの国を



救った。大飢饉から救いあげて、ヨセフはパロの寵愛をえて宰相となってエジプトを治めた。飢饉で苦しんだ同胞たち、ヤコブのお父さんや兄弟たちがエジプトに流れて来た。エジプトで大事にしてもらったけれど、だんだん代が替ってきまして、イスラエルの民がどんどん増え広がる。そして、王様の方も昔のことを思っていない、忘れている王が現れて、今度はエジプトにとってイスラエルは非常に脅威になってきた。このままではエジプトが危いというので奴隷にして弾圧した。イスラエルの民がエジプトの地で奴隷となってこき使われた。その時代が300年、400年と続いたときに、モーセを神さまが遣わされた。その時に神さまは天の高きからモーセのところへ降<sup>くだ</sup>ってきて、モーセに語りかけ、

「お前と一緒にいるから、お前は杖一本もって、このエジプトのパロのところから我が民を救い出せ」

と、あれが「出エジプト」というイスラエルの民族にとっては本当に原体験というべき出来事でありました。「十戒」という映画に出てまいります。そういうことを思い起こします。

「9かれらの艱難<sup>なやみ</sup>のときはエホバもなやみ給いてその面前<sup>みまえ</sup>の使をもて彼等をすくいその愛とその憐憫<sup>あわれみ</sup>とによりて彼等をあがない 彼等をもたげ 昔時の日つ

ねに彼等をいだきたまえり」（イザヤ63・9）

ところが、イスラエルの民はなかなかこのヤーヴェーの神さまのご愛にこたえなかった。すぐに不信仰になったり、背いたり、いろいろなことをしてきた。実にドラマチックな歴史ですけれども、ここでは神さまの側の愛<sup>いとく</sup>しみを引ききました。

それからイザヤ書57章（ここにも神さまの特質が現れています）。

「15至高<sup>いと</sup>く至上なる永遠にすめるもの 聖者となづくるもの 如此<sup>かく</sup>いい給う 我はたかき所きよき所にすみ 亦こころ砕けてへりくだる者とともにすみ 謙<sup>へりく</sup>たるもの 霊をいかし砕けたるもの 心をいかす」（イザヤ57・15）

至高至善なる神さまが、一番低いドン底へ下りて降って来る。どういう人のところに宿り給うかといえ、心砕けてへりくだる者、あるいは砕けたる者——砕けたる者とは打ちひしがれたる者、内面の姿です——そういう人たちの心を活かす。

こうした預言の言葉を引きましたが、イスラエルの神さまというのは言葉をもって語りかけ給う神さまなのです。これはまた実に不思議です。いろいろな八百万<sup>やおよろず</sup>の神々がいらっしやるでしょうけれども、自分で自分の名を「エホバ」「ヤーウエー」と、

「我は有りて在る者（我は有りて在らしむる者）」

と言って、モーセに顕れ、その他預言者たちに顕れ、最後にはキリストに全き姿を顕された。その神さまというのは言葉をもって語りかけ給うお方なのです。これはひとつの特色だと思いますが、そのことは深入りいたしませんで、次に進みたいと思います。



## ●ヨハネの福音書4章(サマリヤの女)

次に新約聖書にまいります。ちよつと長い物語ですけれども、ヨハネ福音書の4章の1節から26節まで引きました。

ユダヤからガリラヤに行く時です。ユダヤは南の方、ガリラヤは北の方です。真ん中、西の方にサマリヤという地があります。サマリヤはもとイスラエルの系統だったけれども、近所の住民たちと混血してしまつたので、イスラエル人からは破門されてしまつた歴史があります。このサマリヤの地で真昼時、イエスが旅に疲れてヤコブの井戸にいらつしやつて、そこで水が飲みたいなあと思つておられた。ちよつと折よくサマリヤの女の人 came たので、「水を飲ましてちょうだいね」と言われた。ところが、イエスという方はユダヤ人であるのに親しく声をかけられるので、サマリヤの女は驚いたわけです。サマリヤの女が物珍しげにイエスさまに答えたものですから、そこでイエスの方から逆におつしやつた。

「もし、あなたが、私に神さまからのどんな賜物が宿っているか、そのことが本当に分かつたら、あなたの方から飲ましてほしいと言うはずだ。そうすれば、

活ける水をあなたに与える」(ヨハネ4・10)

と。サマリヤの女の人は昔から伝統的な生活の中で暮らしている人です。このヤコブの泉はとても大事な深い井戸で、ご先祖さまからずっとご厄介になつてきた。そこから汲む水はとても貴重で、それを自分がイエスという方にあげようかと思つたら、イエスの方から、

「私の方から活ける水を与えるんだよ」

と、そんなことを言われた。

「それは一体どうして汲むんですか!？」

と、そこでイエスは答えておつしやつた。

「すべてこの水を飲む者は、また渴かん。されど私があたえる水を飲む者は永遠に渴くことがない。私の与える水はその人の中で泉となつてあふれ出る。

そこから永遠の生命の水が湧き出てやまない。そういうことになるんだよ」(ヨ

ハネ4・13、14)

と。ヤコブの井戸から何人もご先祖さま以来飲んできた。今の自分たちも飲んでいて。その水で自分たちは生活も守られている。確かに大事な井戸なんです。けれどもそういう生活の繰り返しは、いつか終わりが来る。そしてまた次の世代へと受け継がれてゆく。人間の運命とはそういうものですよ。しかし、

「それだけじゃないんだよ。その今までの繰り返しの中に、繰り返さざるもの、さらにそれを突き抜けてもつとすばらしい永遠の生命、神さまの与え給うもうひとつ上なるものがある。それを私はあなたにあげたいんだ」

と。これがキリストのお心ですね。イエスは明らかに内面的な心の、魂の問題を語ってお



られる。ところが、この女の人はそうは受けとらなかつた。

「だんな様、私が渴かないで何度も汲みに来なくていいように、その水とやらをください」

と。この人はどうも身持ちが悪い。普通の人なら朝早く水を汲みに来るはずなんです。12時頃のこのこやって来ている。でも正直な方です。そこでイエスさまが、

「じゃあ、ご主人を呼んでいらつしやい。ああ、そうだったね、あなたは夫は五人までいらつしやつたけれど、今は夫じゃないわね」

と、全部見抜いてしまったわけですね、霊視、透視された。そこで女の人は驚きました。自分の身の上を見抜かれたものですから、やつと目が覚めた。これはただ者ではない、預言者だと。預言者なら預言者らしい質問をしようと思つたわけです。

「自分たちの先祖は此の山（ゲリジムの山）で拝んでいる。しかしあなた方はユダヤのエルサレムで礼拝すると言っている」

と。そうですね。旧約の世界では、救い主はユダヤ人から出ると云い伝えられてきました。実はご自分が救い主なんです。それで、この女の人の対して、

「此の山でもエルサレムでもない。そういう場所に限定されない本当の礼拝の時が来ているんだよ」

と、言われました。

「21イエス言い給う『おんなよ、我が言うことを信ぜよ、此の山にもエルサレムにもあらで、汝ら父を拝する時きたるなり。22汝らは知らぬ者を拝し、我らは知る者を拝す、救はユダヤ人より出づればなり。23されど真の礼拝者の、霊と真とをもて父を拝する時きたらん、今すでに来れり。父はかくのごとく拝する者を求めたもう。24神は霊なれば、拝する者も霊と真とをもて拝すべきなり』」（ヨハネ4・21、24）

このサマリヤの女、名もなき人、この人が本当に偶然なことにイエスという救い主に出会いました。お昼どきに井戸の水を汲みに来た時に、「水を飲ましてちょうだいね」をきっかけにして、こんな深い問答が交わされた。

「私の与える水は永遠の生命の水だよ」

と言われた。それから、もつと大事なこと、それと同じく大事なことは、礼拝というもの、宗教というもの、それはそれぞれ伝統とか言い伝えというものによって固く受け継がれて来ましたが、枠がありました。その枠をキリストはとつ払っておられる。

「此の山でもあの山でもない、至るところ霊と真をもつて拝する」

ということ、人間の全存在をもつて、

「どこだっていい、今あるところで全身全霊をかたむけて神を礼拝する時、それが本当の礼拝だ。何となれば神は霊であるから、拝する者も霊と真をもつ



「て拝するんだ」

と。私はこういう言葉が大好きなんです。宗教といいますと、どうしてもいろいろな枠があります。それはそれとして大事なんでしょうけれども、それを突き抜けて、本当に人が人である限り我々の創造主なるお方を拝することです。

地球は一つじゃありませんか。地球を照している太陽は一つですよ。大空に輝く太陽、この一つの太陽が、小さい天体の一つである地球というものを愛してやまない。いろいろな天体がありますけれども、地球ほど太陽に愛され、活かしめられている天体はないだろうと思います。何億年の昔から太陽は地球をつかまえて、それに熱と光を与え、そして生きとし生けるものを活かしてくれている。

地上にたくさん民族がいます。全ての民族はそれぞれの神をもっていますけれども、これらの究極なるお方——名前は何であつたつていい——本当に愛そのものなる実在者、その方が人をして活かしている。その活かし給う方の心を体して、あのナザレに現れて来たのがイエスというひとりの人であつた。私はそう思っている。

イエスという方において神のみ心が百%顕れた。イエスは愛そのもののお方です。それは別の言葉でいえば、イエスほど神に深く愛された方はいない。イエスほど神から深く愛され、神の心を体した人はいない。だから、その心をもって今度は人を愛された。人への愛の極みは十字架ということになりました。

父なる神が愛し給う我々人間が実に罪ばかり犯して、神の心を心とすることができない。そういう背きの罪、これはイスラエルの歴史において顕されたけれども、イスラエル民族はいわば人類の代表みたいなもので、ひとつのサンプルです。イスラエルの中から生まれられたイエスでありますけれども、実は我々全人類のために、およそ人が人であるかぎり、その人と共通なものをイエスはもっておられた。そして先程言いましたように、我々の悲しみを、嘆きを、痛みを全部ご自分の身に負っておられるお方です。のみならず今度は、

「私のところへ来たら生命の水を与える。永遠の生命の水が湧き出るんだよ」

と、そういう積極面がある。さつきは担うという、いわば罪を消し去る、病いを消し去る、悲しみを共に担うという姿でした。イエスのところへ来た人の痛みをとり除くだけじゃなく、今度は本当の喜びを与える。生命を与える。

「死んでも死なない生命を与える。そこまでいかなければ私の愛は全うされない」

と。これがイエスのお心だと思えます。相手がサマリヤの女であろうが、異邦人であろうが、そんなことは問題じゃない。かえって伝統的なユダヤ人はキリストに躓きました。そしてキリストを十字架につけてしまった。実に不思議な逆説的な事態であります。このようにして我々異邦人のところに救いが及んできたというわけです。



## ●ローマ書8章（18〜28節）

次のローマ書8章へゆきましよう。ローマ書というのはキリストの一番弟子のパウロが書かれました書簡です。このパウロは復活のキリストに逆らっていたユダヤ教のチャンピオンでありまして、キリスト教徒を迫害する急先鋒でした。ユダヤ教に忠実ならんと欲せばキリスト教を殲滅すべしと、そういう使命感に燃えてキリスト教徒迫害の荒行をしていたというわけです。ある日、大祭司から添書をもらってダマスコへと旅立つて行った。そのダマスコ途上で、キリストが白昼に顕れて、パウロを撃たれた。パウロはぶっ倒されて、三日間目が見えず、ほとんど物が言えず、また食物もとらなかつた。そういう暗黒の三日間を過ごし、それからキリストの弟子のアナニヤという人の按手を通して、パウロの心の眼が聞かれました。

## 「目から鱗のごときものが落ちたり」

と。それから今度は、パウロはキリスト宣教の第一人者になりました。あまりにも鮮やかな転回にまわりの人が驚いたということが使徒行伝というところに詳しく書かれています。このパウロはその後は、ユダヤ教徒から猛烈な迫害を受けます。しかし、どんな迫害にも屈しなかつた。自分はとにかくキリストに逆らっていた

## 「罪人の首である」

と、その首をキリストは赦して、いわば一番弟子としてお用いくださっている。「このご恩に応えないでいられるか」という烈々たる思いがパウロ書簡にあふれています。

そのパウロ書簡の代表的なものが「ローマ書」という書物ですが、そのピークが第8章なんです。今日はピークをもってきました。8章の18節から読んでみます。

「<sup>18</sup>われ思うに、今の時の苦難は、われらの上に顕れんとする栄光にくらぶるに足らず。<sup>19</sup>それ造られたる者は、切に慕いて神の子たちの現れんことを待つ。

<sup>20</sup>造られたるものの虚無に服せしは、己が願によるにあらず、服せしめ給いし者によるなり。」（ロマ8・18〜20）

被造物は人間のみならず自然万物、そういう自然のうめき声をパウロは聞いた。緑の樹々も、もの言わぬ樹々も、実はうめいている。動物たちの中にもうめきの声が聞こえる。それは虚無なんですね。そういう虚無に服さざるをえない。しかし、それは自分の願いではなくて、深み心の中に包まれていた。「服せしめ給いし者によるなり」と。しかし、それで終わりではない。そういう被造物においても、この滅亡の僕、奴隷の姿より解き放されて、神の子たち、我々人間たちと同じく、光栄の自由に躍り入る望みは残されている。そういうふうにはパウロは受けとりました。

「<sup>22</sup>我らは知る、すべて造られたるものの今に至るまで共に嘆き、ともに苦しむことを。<sup>23</sup>然のみならず、御霊の初の実をもつ我らも自ら心のうちに嘆きて、子とせられんこと、即ちおのが体の贖われんことを待つなり。」（ロマ8・22



（23）

キリストの御霊をいただいた我々弟子たち、キリスト信徒たちだつて、自ら心のうちに嘆きて子とせられんこと、体の贖われんこと、死すべき体じゃなくて本当にキリストのあの復活体、栄光のみ姿に変貌させられる、そういう望みをもって我らもうめいている。

「<sup>24</sup>我らは望のぞみによりて救われたり、眼に見ゆる望は望にあらず、人その見るところを争いでなお望まんや。<sup>25</sup>我等もし其の見ぬところを望まば、忍耐をもて之を待たん。」（ロマ8・24〜25）

我らはおかかろ望みによつて救われている。眼に見ゆる望みは望みではない。現に眼で見ているところは何も望む必要がない。まだ見ていない、しかし確かに然しかりなる、そういう事実、将来の事実、それをしつかりと見据えて我々は進んでいく。そういう烈々たるパウロの魂の姿であります。

「<sup>26</sup>斯かのごとく御霊も我らの弱よわきを助けたもう。我らは如何に祈るべきかを知らざれども、御霊みずから言い難なげき歎うめ（呻うめき）をもて執成とりし給たまう。<sup>27</sup>また人の心を極めたもう者は御霊の念おもいも知りたもう。御霊は神の御意みこころに適かないて聖徒のために執成とりし給たまはばなり。<sup>28</sup>神を愛する者、すなわち御旨みむねによりて召されたる者の為には、凡すべてのこと相働ありて益となるを我らは知る。」（ロマ8・26〜28）

私たちは「自分の信仰」で救われているではありません。キリストが我々を愛して、つかまえて、ある日我々に出逢つてくださった。我々の方がそのことに気が付いた。

「ああ主イエスさま、あなたがかくまでも私を愛していてくださいましたか。今までも知らんかつたんです」

「そうだよ、お前が生まれる前からだよ」  
と。そういうものなんです。ある時、それが自分に示された。そして天界にいらつしやるキリストは、ご自分の霊を我々の中に送りこんで、その霊をいつも、まるで守護霊のように我々のそばにおいてくださる、我々の内においてくださる。この御霊が我々の悲しみを知り、我々の痛みを知って、その方が天界のキリストに、そして父なる神さまにいつも執り成しの祈りをしてくださる。我々に祈ろうとする心が起ころのは御霊の執り成しによつて起こってくる。

我々が善良な人間だから、信心深いから祈るんじゃない。こういう御霊のうながしに導かれて殊勝な祈り心が生まれてくる。私はそう思っています。親鸞だつて言いました。

「念仏を申そうという心が起ころのは、これ弥陀みだの御もよおしによる」  
と、親鸞は本当に自分の中に善はないということを徹底的に知っておられました。だからすばらしいですね。私がキリストに対しても同じ角度です。

パウロさんも同じだつたと思います。パウロはキリストに逆らつていた人です。地獄に



行つて必定の人です。それが、キリストはパウロを救い上げ、そして一番弟子にして、「天界から応援するから、お前、頑張れ」

と、いく度もパウロに躰れて励まされ、言語に絶する困難を乗り越えさせて行きました。パウロは地中海伝道、小アジア伝道を貫きました。はてはイスパニヤまで行こうとしていた。こういう盛んなるパウロは、後ろのものを忘れて前に向かって進んで行った。

「自分はあのキリストの十字架の姿に、本当に自分も等しくなり、また復活のお姿にもなりたい」

と、そういう気持ちでパウロは意気盛んでありました。殉教の近い時に、

「自分は祭壇にわが血を注ぐとも、皆さんが喜んでくれるなら、皆さんが本当にキリストを讃えているなら、それがもう自分の喜びだ。喜べ喜べ。」

と、ピリピ書で言っています。そのパウロが先程のように言ってくださっている。

「御霊が言い難いうめきをもって執り成してくださる。御霊は神の聖徒たちのために執り成していただく。そして、そういう者たちにとっては、凡てのこと相働きて益となる、プラスとなる」

と。マイナスと見えたことが、実はそれがきっかけとなって、大きなプラスへと転換していく、人生の大事な岐路であったという。マイナスなことにつつかつて、自分を嘆いているだけでは道は開かれませんか。そういうマイナスのところこそ、本当の光が差し込んで来るんです。

### ●ヒルティの『眠られぬ夜のために』

小池先生が訳されたヒルティの『眠られぬ夜のために』というのがある。昔、白水社から出されました。先生は著作集の第5巻を『百世の師ヒルティ』（1977年刊）という本にして、ヒルティの伝記とか、その他ヒルティの著作の主要なものを全部収録しておられる。その中に『眠られぬ夜のために』からいいところを抜粋しておられますので、その中から二か所とりあげたいと思います。

《あなたがたのなやみをすべて主に投げかけよ。

主は、あなたがたのために心を用い給つ。

汝が家族のための思いわずらいを、

キリストにゆだねまつれ。

汝がなし得るはただ思い計らいのみ。

主は往く道、行く末を瞭かに知り給つ。

主は憂慮をば好み給わざれど、

汝が捧ぐる祈りを喜び聴き給つ。

汝 一策を案ずるのみなるに、主は千策を計り給つ。



かくて誰れも勝手気ままに  
汝を害すなからんために、

キリストは人の心を流水と導きて

汝に恩恵を賜うなり。苦しみも喜びも彼の聖手より  
安んじて享け、断じて気を落さざれ。

主は速かに、汝が運命を変え能う。

それを嘆きなば、汝が運命はいよいよ悪し。

苦難の汝に來たりしは、理由なく

汝をくるしむるためにはあらず。

ただ信ぜよ、まことのいのちの

植えらるるは、悲しみの日にこそ、と。》

最後がすばらしいです。これは3月15日というところに引かれている詩です。その二日  
前の3月13日のところには「希望」という詩が引かれています。

《希望十字架は重い、けれども不思議だ、

それがきみを担っている、きみはそれをほとんど担わなかったのに。

最初は真つ暗だ。けれども終末に

真昼が待っている。——そこへ到る路の名は「断行」。

我らの力微なりとはいえ、きみの托身している

主の力は偉大である。

きみの星は闇の夜に輝よっている、

「今日」に死んだね——「明日」は生命だよ。》

「断行」とは決然と意を決してそこへ飛び込んでいく、躊躇しないでやり抜く、躍り込んでいくということですが、こういう詩が引かれています。これと先程の、

「神を愛する者、すなわち御旨によりて召されたる者の為には、凡てのこと  
相働きて益となるを我らは知る。」（ロマ8・28）

と相通じると思います。

### ●ローマ書8章（29～39節）

もう一度ローマ書に戻りますと、29節、30節。

「神は預じめ知りたもう者を御子の像に象らせんと預じめ定め給えり。こ  
れ多くの兄弟のうちに、御子を嫡子たらせんが為なり。又その預じめ定め

たる者を召し、召したる者を義とし、義としたる者には光榮を得させ給う。」（ロ

マ8・29～30）

我々の成るべき姿は栄光の姿、光輝く姿に我々は遂に化せられる。これが望みであります。



31節からですが、35節、36節は迫害の姿を表しています。

「31然れば此等の事につきて何をか言わん、神もし我らの味方ならば、誰か我らに敵せんや。32己の御子を惜まずして我ら衆のために付し給いし者は、などか之にそえて万物を我らに賜わざらんや。33誰か神の選び給える者を訴えん、神は之を義とし給う。34誰か之を罪に定めん、死にて甦えり給いしキリスト。イエスは神の右に在して、我らの為に執成し給うなり。35我等をキリストの愛より離れしむる者は誰ぞ、患難か、苦難か、迫害か、飢か、裸か、危険か、剣か。36録して『汝のために我らは、終日ころされて屠らるべき羊の如きものとせられたり』とあるが如し。37されど凡てこれらの事の中にありても、我らを愛したもう者に頼り、勝ち得て余あり。38われ確く信ず、死も生命も、御使も、権威ある者も、今ある者も後あらん者も、力ある者も、39高きも深きも、此の他の造られたるものも、我らの主キリスト・イエスにある神の愛より、我らを離れしむるを得ざることを。」(ロマ8・31〜39)

これは絶対愛といえます。絶対愛というのは相手の姿にかかわらないということです。相手がどつちを向いていようと、その愛する方の愛の御旨というの貫かれて変わらない。人の心は変わりますよ。けれども神の御心は変わらない。そんなものは哲学じゃない。現実である。イエス・キリストにおいてそのような愛が顕れた。この今読みました後半のところに、

「我等をキリストの愛より離れしむる者は誰ぞ」

とあります。「キリストの愛」ときました。そして終わりのところでは、「我らの主キリスト・イエスにある神の愛」とあります。神の愛はキリストに顕れ、キリストは神の愛を体して、我々に対する愛を貫徹なさいました。今もなさっております。だからへこたれない。

我々の側に根拠があるのではない。キリストの熱愛が我ら一人一人を——そうなんです、一人一人です、十把一からげじゃない——一人一人がキリストというお方と不思議な出逢いをするんです。

太陽の光がありますと、たしかに太陽の光は私を照らしてくれている。他の人も照らしているけれども、私を照らしてくれている。だから私は暖かい、私の内が熱くなる。「太陽よ、ありがとう」と、私は心の中でいつも思っていますけれども、キリストの愛というのは本当に人格的な愛です。一人一人なんです。比較できない。他の人に対する愛し方と、私に對する愛し方とまた違うかもしれない。まったく愛なんです。そういう絶対愛、この絶対愛をいただいた者だけが、今度は隣人に対して絶対愛で対していける。キリストは本当に神に愛しぬかれた方です。だから人をあのように愛された。私はそう思っている。

その愛しぬかれたキリストがああひどい十字架を負わねばならなかったという、あの逆説は、神さまが一番苦しんでおられたに違いない。



「わが神、わが神、なんぞ我を棄て給いし」(マタイ27・43)  
と叫ばれた。しかし、それを貫かれたキリスト、そういうキリストが地獄で死につばなしではない。神に義を貫き、神の御心を貫き、人に対する愛を貫き、神の御旨に従って己れを犠牲にして献げた。そういう方が死につばなしなら、誠に神も仏もない。

「聖書に復活の記事が一つもなくとも、私はキリストの復活を信ぜざるを得ない」と、小池先生は言われた。私は1961年の春、西ノ宮のある教会で先生がそう話されたのを聴いた時、全身震えましたよ。

「これが信ずるといふことだ」

と。聖書に書いてあるから信ずるんじゃない。そうならざるを得ない理の世界だということ。私は学者のはしくれですから、やつぱり理に合わないことはいやなんです。理に合ってくれないと困る。その理というのは、学問の世界には学問の理があります。宗教の世界、魂の世界、この宇宙の根源の世界はその根源の理があります。理があるから尊い。真理なんです。だから小池先生は言われたですよ。

「キリスト教を信じたら何か人間がせまくなる、知識がせまくなるなんて思ったら大間違いだ。本当のものにつかまれたら、本当の姿が見えてくる。いろいろならわれから解放されて、物事をまことの真の姿において、今まで見えないものがそつくり見えてくる。これがキリストのすばらしさだ」

ということを、やはりこの講演会場でおっしゃった。1959年の11月9日、月曜日の晩でした。それで感激して先生と縁ができてしまったわけなんです。同じ会場で今日またお話を聞くのですが、これも不思議な因縁だと思っている。

先生と私は年齢が28年違うのですが、私が60歳の還暦を迎えた時、先生は88歳で米寿をお迎えになられた。もうすぐ先生は90歳ですけれども、まだお仕事があつて、

「あと7、8年はかかる仕事だよ」〔註：詩作のこと。遺作詩集『霊界の星々』〕  
と言っておられるので、私もそう簡単にへこたれないつもりですが。

まあそういうことで、何か脱線してしまいました。

それで、キリストの愛を受ければ、今度はそれをキリストはご自分に返してほしいとおっしゃらない。

「私から受けた愛を人々に流せ」

と。キリストが弟子たちに対しておっしゃった訣別の言葉があります。

「私があなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。私があなたがたを愛したように、今度はあなたがたは隣人を愛しなさい」(ヨハネ

13・34)

そういうことがキリストのただ一つの誠命いしましめでした。他の「宗教儀式を守れ」なんておっしゃらなかった。「愛」の一言です。パウロも言いました。



「律法の全ては愛これに尽きる。どんな知識があろうと、どんな奥義に精通しよう、山を移すほどの信仰があろうと、愛がなかったら一切は空しい」  
と、そういうところに私はすごく感動しました。私なんかは熱血漢ですから、たまらんわけですね。

### ●詩篇第36篇 (生命の泉)

そして最後にいきましよう。ローマ書12章、これはキリスト者がこの世にあつてどういう姿で生きるかを簡潔に示しているのです、ここを引きました。これはこの世に生きる我らの姿といつていい。

「<sup>9</sup>愛には虚偽あらざれ、悪はにくみ、善はしたしみ、<sup>10</sup>兄弟の愛をもて互に愛しみ、礼儀をもて相譲り、<sup>11</sup>勤めて怠らず、心を熱くし、主につかえ、<sup>12</sup>望みて喜び、患難にたえ、祈を恒にし、<sup>13</sup>聖徒の欠乏を賑し、旅人を懇ろに待せ、<sup>14</sup>汝らを責むる者を祝し、これを祝して誼うな。<sup>15</sup>喜ぶ者と共によろこび、泣く者と共になけ。<sup>16</sup>相互に心を同じうし、高ぶりたる思をなさず、反つて卑きに附け。なんじら己を唖しとすな。<sup>17</sup>悪をもて悪に報いず、凡ての人のまえに善からんことを図り、<sup>18</sup>汝らの為し得るかぎり力めて凡ての人と相和げ。」(ロマ書12・9〜18)

実はこれキリストのお心でしょ、キリストの姿です。はじめに引きました山上の垂訓の言葉をパウロなりに告白すればこんな言葉になつて表れてくる。

そしていよいよ最後ですけれど、旧約聖書の詩篇第36篇、エホバの僕ダビデの歌という見出しがありまして、その中の数節を読ましていただきたいと思ひます。

「<sup>7</sup>神よなんじの仁慈はとうときかな人の子はなんじの翼の陰にさけどころを得。<sup>8</sup>なんじの屋のゆたかなるによりてことごとく飽くことをえんなんじはその歡樂のかわの水をかれらに飲ましめたまわん。<sup>9</sup>そはいのちの泉はなんじに在りわれらはなんじの光によりて光をみん。<sup>10</sup>ねがわくはなんじを知るものにたえず憐憫をほどこし心なおき者にたえず正義をほどこしたまえ」(詩篇36・7〜10)

この9節から「生命の泉」という題をとらしていただいたわけですが。今日お話してきましたように、キリストの心、預言者の心、またパウロの心、そういうものを私たちが身親しく自分のものとして味わいますとき、また身に体しますとき、我々は、初めは嘆きであつたかもしれない、嘆き悲しみからキリストのところに導かれてキリストのところに行つてみたら、思いもよらない永遠の生命、死んでも死なない生命と、すばらしい栄光の約束をもつて迎えてくださり、そして現にローマ書8章にあるように、今もなお御霊のキリストは我々を執り成し導いてあり給う。そういうことを深く実感すれば実感するほど、



「<sup>9</sup>そはいのちの泉はなんじに在りわれらはなんじの光によりて光をみん」（詩  
篇36・9）

こういう告白が讚美の告白として出てくる、そういう思いです。

「あなたの光で光を見てゆきます。神の見えざる光でこの世のいろいろな光を見ていく、光に照らされて物事を正しく見てゆく、また包んでいきます」

と、何かそういう思いをこの詩篇第36篇の9節が告白しているように思えたものですから、ここをもつて締めくくるとさせていたただきたいわけでありました。

それではどうもご清聴ありがとうございました。

（森下一男主筆「ともしび」誌第253〜272号、1993/6/6〜7/11より転載）

